

「ロボット大あばれ」—— ストルガツキー兄弟 “Spontaneous Reflex” に見る 表記ゆれと掲載分野の影響

星野 保[†]・畠山 研^{††}

“Robot Rampage”: Notation-fluctuation and Publication-field Influences on the Strugatsky Brothers’ “Spontaneous Reflex”

Tamotsu HOSHINO[†] and Ken HATAKEYAMA^{††}

ABSTRACT

Since science fiction entered popular culture, several works of the brothers Arkady and Boris Strugatsky have been translated into Japanese. However, one of their short stories from *Спонтанный рефлекс* (“Spontaneous Reflex” or “Initiative”), named and translated as “Robot Ramage” by Masao Segawa, has not been included in any of their Japanese translations. In this study, we elucidate three points that dissuade us from considering “Robot Ramage” as the brothers’ work: 1) In his translation, Segawa gave the work a unique and totally different title from the original; 2) He used the word “ストルガツキー” when he wrote the authors’ name, not the general word “ストルガツキー”; and 3) Segawa’s “Robot Ramage” has been broadly classified as children’s literature.

Key Words: author, Children’s literature, notation fluctuation, Science Fiction, spelling variants, Russia

キーワード: SF, 作家名, 児童文学, 表記ゆれ, ロシア

1. はじめに. 著者名の日本語表記のゆれ について: Virginia Woolf の事例

日本では、海外の人物名をカタカナで表記するときゆれが生じることはめずらしくない。一般的な例として、英語圏の作家を取り上げる

と、イギリスの女性作家ウルフ (Virginia Woolf, 1882年1月25日~1941年3月28日) のファーストネームは、ふつう「ヴァージニア」と表記されるが、「ヴァ」の部分は「バ」と書いてもよい。「ヴァージニア」と「バージニア」、二通りの表記が一つの場所 (たとえば、一つの論文や一冊の本、一つのウェブサイト等) に同時にあれば、表記ゆれが発生しているということになる。

ウルフのファーストネームをめぐる表記ゆれについては以下の事例がある。光文社から古典新訳文庫シリーズとして2010年に出た『ダロウエイ夫人』 (*Mrs. Dalloway*, 1925) では、作品の解

令和3年10月29日受付

令和4年1月31日受理

[†] 工学部生命環境科学科・教授

^{††} 秋田大学教育文化学部学校教育課程・講師

説をウルフ研究者の松本朗が担当しており、ここでは「ヴァージニア」と表記がある。¹⁾ ウルフの場合、「ヴァ」が広く使用されていることは、この作家のアカデミックな研究を目的とする団体名が「日本ヴァージニア・ウルフ協会」である点を見てもわかるとおりで、松本も当然「ヴァージニア」にしたとうかがえる。一方、訳者の土屋政雄は「バージニア」表記を選んでおり、「訳者あとがき」で「バ」の使用理由を次のように説明する。

第一は、もちろん、ヴで表される音が日本語には本来ないことである。いくら「ヴァージニア」と書いても、読む人は十中八九（いや、たぶん十中十）「バージニア」と読む。英文を読むときは正確にvを発音できる人も、日本語の文脈では「バージニア」と読む。日本語にない音なのだから、そうならざるをえない。そして、どうせバと読むのなら、最初からバと書けばよいというのが私の考えである。²⁾

このあとで土屋は、第二の理由として「日常発音し分けなければ、当然、書き分けるのは困難であり、ヴとブの使い分けに一貫性をもたせるのは難しい」と述べ、「さまざまな国の言葉が日本語に入ってきている現在」にあって「バビブベボで統一するのがいいだろう、と私は思っている」と続ける。³⁾ このように、光文社の『ダロウェイ夫人』はカタカナ表記のゆれを敢えて抱えて世に出た一冊となっている。

以上のように、表記ゆれは人それぞれの好みや考えかたのために簡単になくなるものではないが、そこで発生するのが検索上の取りこぼしである。ウルフの作品の日本語訳を調べる際、「ヴァージニア・ウルフ」と検索し、その表記と完全一致するものだけがすべてと思っていると、「バージニア・ウルフ」表記のものは取りこぼされてしまう。二通りのカタカナ表記が与えられているとわかれば、二通りで検索すればよいが、表記が何通りあるかを知るには誰かに

教えてもらうか自分で気づくしかない。ただし、この問題はウルフに関して言えば全く大きなことではない。「ヴァ」か「バ」で表記が分かれたとしても「ウルフ」というセカンドネームにはゆれがなく、それを頼りに検索できるからである。似た例に、ウルフと同時代の英語圏作家でドライサー (Theodore Herman Albert Dreiser, 1871年8月27日～1945年12月28日) が挙げられる。ファーストネームは古くから「シオドー」から、「セーオドア」、「セオドア」、「シオドア」等いくつもの表記があるが、セカンドネームはだいたい「ドライサー」で統一されている。⁴⁾ 問題は、セカンドネームの表記を複数与えられた作家の場合であり、本稿で以下に取り上げるロシアのSF作家ストルガツキー兄弟がそれにあたる。⁵⁾

昨今、スマートフォンやパソコンでは、二通り以上の表記方法がある作家名については、たとえそのうちの一つだけを用いて検索しても、別の表記の検索結果も含めて表示されたり、最も一般的な表記の検索結果へ自動で切り替わったりする機能が充実しており、また、古書を扱うウェブサイトや優れた検索プログラムを採用している図書館でも同じことが期待でき、コンピュータやAIのめざましい進歩とともに表記ゆれで生じる問題もいずれ解消されると思われる。だが、テクノロジーによって文献一覧がいつか自動で生成されるだろうと待つだけではその間研究は進まず、そもそもコンピュータ上へ古い文献も含めてすべての情報が正確に登録されると楽観視もできない。データベースへ登録が見過ごされてきたままの文献は、発見者が報告しないかぎり、リストアップされずに消えゆく可能性もある。以上のような現状を踏まえ、本稿では、実際にストルガツキー兄弟の邦訳にもリスト上で未掲載の作品があることを紹介し、それらが今も未掲載のまま注目されない要因としてカタカナ表記のゆれを指摘する一方、さらに加えて、作品のジャンル分けの影響も働いていることを報告する。

2. ストルガツキー兄弟とその作風の紹介

ストルガツキー兄弟 (Братья Стругацкие, Arkady & Boris Strugatsky) は、ソビエト時代を代表するロシアのSF作家の一組である。兄のАркадий Н. Стругцкий (1925年8月28日～1991年10月12日) は日本文学研究者であり、弟の天文学者である Борис Н. Стругцкий (1933年4月14日～2012年11月19日) と共同で多数のSF小説を発表している。⁶⁾ また、ソ連の映画監督 Андрей А. Тарковский (Andrei A. Tarkovsky) による《Сталкер》*Stalker* の原作者として知られている (以下、ロシア語作品については、二重山括弧にて表記する)。

弟のボリスの役割が前面に出た作品 (《За миллиард лет до конца света》『世界終末十億年前一異常な状態で発見された手記』など科学的知見の紹介、哲学的な議論が目立つもの)、兄のアルカジィが主体と思われる作品 (《Хромая Судьба》『モスクワ妄想倶楽部』や《Град обреченный》『滅びの都』などの寓意性の強いもの、社会批判的なもの) などからわかるとおり、両者には異なる特徴があるが、すべての作品に文明論的な視点が貫かれていることが共通の魅力となっている。⁷⁾

日本でも二人の作品は多数翻訳され、1992年時点でのリストと解説 (ストルガツキー兄弟 邦訳作品総解説) が作成・公開されている。⁸⁾⁹⁾ この邦訳リストには、具体的な作成の趣旨やどのような読者を対象とするかは特に示されていないが、解説の最後にある編集部によるコメントでは次のように述べられている。

ストルガツキー自身も言っているように、彼らの作品の注目すべき点は主に中・長編にある。一九五八年から六三年ごろまでに書き散らされた短編の多くは科学啓蒙的なワン・アイデア・ストーリーにすぎず、正直言って特にストルガツキーを研究しようとする者でない限り、あまり読む価値があるとは思えない。これからストルガツキーを読もうとする人には、「ソヴェート文

学」九十八号に掲載された「火星人第二の襲来」がお薦めだが、これはちょっと手に入りにくい (しかし注文すれば書店で手に入る)。やはり『蟻塚の中のかぶと虫』や群像社の諸作品をお薦めすることになるのだろうか。群像社の諸作品の中では『みにくい白鳥』あたりが面白いので先入観を捨ててチャレンジしてみしてほしい。以上、個人的なお薦めの書でした。¹⁰⁾

この文章から、ロシア SF の研究者ではなく、ストルガツキーに興味があるが、あまり読んだことがなく、ロシア文学に親しみのない層を対象としているように思われる。

本稿の執筆者の一人である星野は、ロシアSF、特にストルガツキー兄弟の作品に興味があり、その収集を続けている。このうち児童文学として掲載された書籍および作品が前掲のリストに収録されていないことを確認した。

3. 邦訳リスト未掲載の書籍および作品

1) ストルガツキー兄弟原作

「コムリン博士の六本のマッチ」

大伴昌司 編

『毎日新聞少年少女シリーズ 世界SF名作集 シニア版』

毎日新聞社、1964年4月20日発行

初出は、《Шесть спичек》1956年発表。内容は、ロシア語SF翻訳の草分けである袋一平 (1897年10月17日～1971年7月2日) による「六本のマッチ」のジュブナイル版である。本作は、『現代ソビエトSF短編集 宇宙翔けるもの』早川書房、1963年；『S-Fマガジン』1968年2月号；飯田規和編『21世紀の文学 世界のSF全集 33 世界のSF (短編集) ソ連東欧篇』早川書房、1971年；福島実正編『異色SF おかしな世界』、芳賀書店、1972年に掲載されていることが、トーキングヘッズ編集室作成のストルガツキー兄弟の邦訳作品リスト

でわかる。いずれも訳者は袋一平である。

編者の大伴昌司（1936年2月3日～1973年1月27日）は怪獣図鑑などの著者・編集者であり、仏文SFの翻訳をおこなっているが、ロシア語の翻訳歴は見当たらない。『毎日新聞少年少女シリーズ 世界SF名作集』には「この原作はハヤカワSFシリーズ『宇宙翔けるもの』にあります」と記されていることから、¹¹⁾袋の訳文を基に翻案されたものと考えられる。

2) アルカデイ・ストルガツキー ボリス・ストルガツキー 共作

「ロボット大あばれ」

文・瀬川昌男 絵・花野原芳明

『三年生の学級⑧三年生のS・Fものがたり』

集英社、1974年初版1刷発行

本作の題名が直接示すストルガツキー兄弟の作品はないが、児童文学者であり瀬川昌男の姉である山主敏子による本書巻末の解説に、本作の原題が「自発的反射作用」と記されている。¹²⁾このため、本作の原題は1958年発表の《Спонтанный рефлекс》（英文題名：“Spontaneous Reflex”または“Initiative”）と判断できる。本作は、*Знани-сила*, 8月号 pp. 24-28に掲載された。また、本作は前出の邦訳リスト・作品解説に未掲載であり、これが唯一の邦訳である。

本作の文を担当した瀬川昌男（1931年6月6日～2011年7月10日）は、翻訳家・SF・児童文学作家であり、彼の逝去後、追悼のためにSF評論家の高橋良平が作成したと推定される「瀬川昌男 書誌（未完）」では、本書の収録作として【「ロボット大あばれ」A & B ストルガツキー（「自発的反射作用」）】と記されている。¹³⁾少なくとも高橋は本作がストルガツキー兄弟の作品であると認識していた。しかし、邦訳リストを作成したトーキングヘッズ編集部は、本作を未見あるいは敢えて対応しなかった可能性があるのではないか。これに関しては後述する。

本作は、惑星探査用に開発中の自己制御型大

型ロボットが指示者の不在時、自ら興味のおもむくままに施設や市中を観察しようとして、これらを破壊し、この騒動によりロボットが確保されるまでの内容である。

ロシア語原作では、作品は「***」により、5つに分けられている（最後のみ*の間にスペースを追加した「* * *」となっている）。また、子細後述の英語版“Spontaneous Reflex”では1から6の章番号がついている（ただし5はない）。「ロボット大あばれ」では、

原子ろのへや（英語版1章に相当）

ブルドーザーしゅつどう（2・3章に相当）

しずまれウルム（4章に相当）

と章題がつけられ、原作の「* * *」以降、英語版の6章の内容が削られている。山主敏子による解説では「この作品でも、少年少女むきには難解なためにここでは省略されていますが、コンピューターの精巧なしくみなど、さすが、科学者のかいたS・Fだとうなずかれます（原文ママ）」とある。¹⁴⁾

4. 「ロボット大あばれ」は何を基に翻案されたのか？

瀬川の少年期までの自伝では、ソ連・ロシアに関する記述はなく、¹⁵⁾ロシア語原著を翻訳できたかは不明であった。そこで、本稿を書くにあたり、本の雑誌編集部を通じて、「瀬川昌男 書誌（未完）」を作成したと考えられる高橋に瀬川のロシア語翻訳について尋ねたところ、「『瀬川昌男氏のロシア語翻訳については知りません』とのことでした」との返信を得た（2021年3月10日、本の雑誌編集部・松村眞喜子氏より）。また、出版元である集英社第2編集部児童書担当編集に、本書出版の経緯に関して問い合わせたところ、当時の事情を知るものがおらず詳細は不明との回答を得た（2021年9月3日確認）。

このように、瀬川のロシア語翻訳については

明らかにならなかったが、彼は天文学・宇宙開発に多大な興味を持っており、日本子どもを守る会編『世界100人の物語全集 私はこんな人になりたい 集英社版 (9) 発見発明の物語』集英社、1964年1月18日発行に「宇宙開発の父 ロケットを初めて考えたツィオルコフスキー」を書き、岸田純之助 編、中山正美 等絵『新しい世界の伝記 4 宇宙への道をひらいた人々』学習研究社、1965年初版発行に「ツィオルコフスキー」、『少年少女 世界の名作 ソビエト編—5 石の花／金星探検ほか』小学館、1974年3月25日初版発行に、宇宙ロケットの父と呼ばれるロシアの「ツィオルコフスキー」の伝記を執筆している。この点で、SF作家でもある瀬川にはソ連・ロシアの宇宙開発の十分な知識があったとうかがえる。

また、「ロボット大あばれ」以外で瀬川の翻訳したロシア語原作のSF作品には、エム・イーラム作他、瀬川昌男訳編、『世界こども名作館 8 SFと未来篇 空飛ぶ円盤の三巨人』潮出版社、1974年12月20日初版発行がある。本書には、バレンチナ・ツラフレバ「いきていたいん石」とグレゴリー・グレビッチ「黒い太陽のひみつ」の二作品が収録されている。

本書で瀬川が書いた「作品と原作者について」によれば、「『いきていたいん石』は、もとの題名を『星からきた石』といい」、「『黒い太陽のひみつ』は、ソ連の作家、グレゴリー・グレビッチ（一九一七年～）の作品で、原題は『りゅう座暗黒星』とでも訳したらいいでしょうか」と記されており、¹⁶⁾それぞれの作品を彼は児童向けに改題したとわかる。

「ロボット大あばれ」の原作である《Спонтанный рефлекс》が1958年に発表されたことは既に述べた。本作の英訳は、米国Ziff-Davis Publishing Co.より1959年5月に刊行された*Amazing Science Fiction Stories*, 33巻5号に“Initiative”と題して掲載され、同様の題名でUltimate Publishing Co., Inc.より1973年6月に*Thrilling Science Fiction*に再掲されている。

また、1961年に出版されたソ連の海外向け出版社の英語部門であるモスクワのForeign Languages

Publishing Houseにより、Science-Fiction Libraryの一冊、*A Visitor from Outer Space. Science-Fiction Stories by Soviet writers* に“Spontaneous Reflex”の題で収録されている。

さらに、1962・1966・1968年には、同様の内容で*Soviet Science Fiction With a New Introduction by Isaac Asimov, Striking Tales of Outer Space*, translated by Alexander Bajayev, Collier Books, New Yorkが出版されている（1968年版では、副題が*From Russia -- and Wild! Six Hold-on-to-your Hat Stories by the Soviet Science Fiction Writer*に改題されている）。これらの書籍には、ほかに、

- A. Belayev. “Hoity-Toity”
- A. Kazantsev. “A Visitor from Outer Space”
- A. Kazantsev. “The Martian”
- G. Gurevich. “Infra Draconis”
- V. Savchenko. “Professor Bern’s Awakening”

が収録されており、ここには前掲のグレビッチの作品がある。本書に掲載されたG. Gurevich “Infra Draconis”は、ストルガツキー兄弟、西本昭治・編訳『現代ソビエトSF短編集2 竜座の暗黒星』早川書房、1966年の題名と同一の作品である。

また、バレンチナ・ツラフレバ「いきていたいん石」は、1961年に出版された*The Heart of The Serpent*, Foreign Languages Publishing House, MoscowにValentina Zhuravleva “Stone from the Stars”として掲載されている。加えて、1962・1967年に同様の内容で*More Soviet Science Fiction with an Introduction by Issac Asimov, Five Strange Stories of Life in the Future, Russian Style*, translated by Roza Prokof'eva, Collier Books, New Yorkとして出版されている。これらの書籍には、本作以外に、

- Ivan Yefremov. “The Heart of the Serpent”
- Anatoly Dnieprov. “Siema”
- Victor Saporin. “The Trial of Tantalus”
- Arkady and Boris Strugatsky. “Six Matches” 「六本のマッチ」

が収録されている。

これら書籍は、いずれも『三年生の学級⑧三年生のS・Fものがたり』、『世界こども名作館 8 SFと未来篇 空飛ぶ円盤の三巨人』出版以前に公開されており、瀬川は英文の出版物を確認した可能性がある。

当時のソ連では、*A Visitor from Outer Space*の他言語版として、英語版に先立ち、1960年、ドイツ語版 *Der Bote aus dem All*には「ロボット大あばれ」が“Spontaner Reflex”として、1962年、フランス語版 *Le Messager du Cosmos*にはそれが“Réflexe spontané”として出版され、ほかには同年、フィンランド語版 *Vieras Avaruudesta*で“Unko”という題で世に出た。

また、他の出版社からも、1963年のイタリア語版は、イタリア Piacenza の Casa Editrice La Tribuna 社の *Galassia*, 28号に“Riflesso spontaneo”として、ルーマニア語版は、1964年にルーマニアの Știință & Tehnică 社の *Colecția, Povestiri științifico-fantastice*, 220号に“Reflex spontan”として同じ意味の題が使用されている。

ドイツ語訳は、*Der Bote aus dem All*と同年の1960年にドイツ民主共和国（東ドイツ）・ベルリンの Berliner Verlag 社による *Revue Rund um die Welt*, 6号に“Das mechanische Gespenst”（本稿の執筆者の一人である星野訳:「メカニカルゴースト」）として掲載された。注目すべきものは、このあと、1963年、東ドイツ・ベルリンの Verlag Neues Leben 社から *Das Neue Abenteuer*, 210号“Ein Roboter bricht aus”（星野訳:「ロボット急発進」）の題名で出版された書籍である。尚、本書には、バレンチナ・ツラフレバ Валентина Журавлёва 《Алмаз в 20000 каратов》のドイツ語訳である“Ein Diamant von 20000 Karat”（星野訳:「2万カラットのダイヤモンド」）が掲載されている。この作品は、1969年に同じく、ソ連と関わり深い東ベルリンの Verlag Kulture und Fortschritt 社から出版された *Meuterei auf dem Mond*に同名で収録されている。この題は、瀬川が採用した題名と共通点を持つ。

ロシア語同様、瀬川のドイツ語翻訳についても不明であるが、彼は『少年少女世界の名作 30 ドイツ編 3 ハウフ童話 猛獣使い/ウィリアム・テル……他』（原文ママ）小学館、1972年初版発行にて「化学工業の父 デュスベルグ」を担当している。これは、ドイツ・バイエルン社で活躍した Friedrich Carl Duisberg の伝記である。しかし1963年、講談社より、星野芳郎、前田哲郎による『技術革新への道 20世紀を動かした人々 4』が刊行されており、この中で前田が「カール・デュイスベルグ」を執筆しており、この内容を瀬川が知ることができた可能性もある。

1963・1969年に公開された“Ein Roboter bricht aus”は、いずれも Erich Einhorn による翻訳であり、若干その訳語に差異が見られるが、内容に差はなかった。ただし、ロシア語原作・英語版に見られる5章立てではなく、3・4章の一つにまとめている。これらの構成は「ロボット大あばれ」とは異なる。

これらの書誌情報から、瀬川は《Спонтанный рефлекс》の英語翻訳である“Spontaneous Reflex”を基に、また、ドイツ語訳である“Ein Roboter bricht aus”を参考に、「ロボット大あばれ」を翻案したと考えられるのである。

5. 著者名の表記ゆれの影響

本稿では、「ロボット大あばれ」が邦訳リスト・作品解説に未掲載である理由として、日本語訳時の著者名の表記ゆれと掲載分野の影響が大きいと考えた。

ストルガツキー兄弟の代表的な表記は、深見弾らの訳による「ストルガツキー」で、早川書房などのSF作品に多く見られる。一方、それと別に、同じく深見弾らが翻訳し、ロシア文学を専門とする群像社の出版物に見られる「ストルガツキイ」もある。

同一訳者（深見弾）による著者名の表記ゆれ

に関して、出版社に問い合わせたところ、群像社・島田進矢氏より以下の返信を頂いた。「単純に出版社や訳者の方針の違いです。小社では創業者がロシア語のアクセントにあたる部分（正確には音をのばす音節）を長音にして、あとは原綴りに準ずるという方針で-кий はローマ字表記でも-kiiまたは-kijになるので『イ』としています。ただ、音としては日本語使用者の耳には『キー』と聞こえ、ロシア人の名前は『何々スキー』ということで日本では定着してしまっているのも確かです。」（2021年9月1日確認）。このことは、訳者の意向以外に、出版元の意向があることがわかる。

ストルガツキー兄弟の表記について、翻訳された作品には以下がある。これらを出版年: 訳者, 「作品名」（収録書籍と一致する場合は省略）『収録書籍』または雑誌名, 出版社の順に示す。

・ストルガツキー：20例

- 1963: 袋一平「六本のマッチ」『現代ソビエト SF 短編集 宇宙翔けるもの』早川書房
- 1963: 飯田規和「最初の試み」『S-F マガジン』早川書房
- 1964: 袋一平? / 大伴昌司編「コムリン博士の六本のマッチ」『毎日新聞少年少女シリーズ 世界 SF 名作集 シニア版』毎日新聞社,
- 1966: 西本昭治「さすらいの旅をつづける者たちについて」『現代ソビエト SF 短編集 2 竜座の暗黒星』早川書房
- 1968: 袋一平「六本のマッチ」『S-F マガジン』早川書房
- 1970: 太田多耕「神様はつらい」『21世紀の文学世界 SF 全集 24 ゴール グロモワ ストルガツキー兄弟』早川書房
- 1971: 袋一平「六本のマッチ」『21世紀の文学世界 SF 全集 33 ソ連東欧篇』早川書房
- 1971: 山田忠「アライドの白い柱」『S-F マガジン』早川書房
- 1972: 袋一平「六本のマッチ」『異色 SF おかしな世界』芳賀書店

1973: えびはら・たけし「砂漠の夜」『現代ソビエト SF シリーズ 1 不可能の公式』プログレス出版所』

1973: プログレス「よくできた惑星」『現代ソビエト SF シリーズ 2 よくできた惑星』プログレス出版所

1973: 宮沢俊一「さまよう者と旅する者」『現代ソビエト SF シリーズ 3 反世界の島』プログレス出版所

1974: 深見弾「非常事態」『S-F マガジン』早川書房

1974: 深見弾「非常事態」『現代ソビエト SF 短編集 3 アトランティス創造』早川書房

1974: 深見弾『幽霊殺人』早川書房

1978: 深見弾「密猟者」『S-F マガジン』早川書房

1978: 深見弾『収容所惑星』早川書房

1982: 深見弾『蟻塚のかぶと虫』早川書房

1978: 深見弾「友情についての物語」『S-F マガジン』早川書房

1983: 深見弾『ストーカー』早川書房

・ストルガーツキー：2例

1979: 橋本俊雄「醜い白鳥（連載第1回）」『イスカーチェリ』イスカーチェリ・SFクラブ

1980: 橋本俊雄「醜い白鳥（連載第2回）」『イスカーチェリ』イスカーチェリ・SFクラブ

・ストルガツキイ：11例

1981: 橋本俊雄「醜い白鳥（連載第3回）」『イスカーチェリ』イスカーチェリ・SFクラブ

1982: 橋本俊雄「醜い白鳥（連載第4回）」『イスカーチェリ』イスカーチェリ・SFクラブ

1989: 深見弾『月曜日は土曜日に始まる 若い科学者のための物語』群像社

1989: 深見弾『世界終末十億年前 異常な状態で発見された手記』群像社

1989: 深見弾『願望機』群像社

1989: 中沢敦夫『みにくい白鳥』群像社

- 1990: 深見弾『トロイカ物語』群像社
 1991: 深見弾『そろそろ登れカタツムリ』群像社
 1993: 中沢敦夫『モスクワ妄想倶楽部』群像社
 1994: 深見弾『地獄から来た青年』群像社
 1997: 佐藤祥子『滅びの都』群像社
- ・ ストルガーツキイ：4例
 - 1967: 彦坂諦「ラドガ崩壊」『ソビエト SF 選集—3 ラドガ崩壊』大光社
 - 1973: 深見弾「リトル・マン」『ソヴェート文学』東宣出版
 - 1986: 深見弾「スプーン五杯の霊薬」『ソヴェート文学』群像社
 - 1987: 橋本俊雄「火星第二の襲来 — 或る常識人の日記 —」『ソヴェート文学』群像社
 - ・ ストルガツキー：1例
 - 1974: 瀬川昌男「ロボット大あばれ」『三年生の学級⑧三年生のS・Fものがたり』集英社
 - ・ ストゥルガーツキイ：1例
 - 1968: 彦坂諦「ストゥルガーツキイ兄弟との対話 科学的予言の道」『ソヴェート文学』群像社

以上、表記は6種。早川書房の書籍・雑誌が使用する「ストルガツキー」が最も多く、20例であった（この他、S-F マガジン誌に掲載されたインタビューや書評などを追加するとより多くなる）。次いで、ロシア文学を専門とする群像社の出版物が使用する「ストルガツキイ」が11例であった。これ以外の表記は、いずれも1987年以前のものであり、これ以降「ストルガツキー」と「ストルガツキイ」に収斂した。

この中で橋本俊雄の動きが興味深い。1979・1980年に橋本は、SF同人誌『イスキューチェリ』にて「醜い白鳥」（連載第1・2回）を発表した際、原作者名を「ストルガーツキー」と表記している。その後、1981・1982年に同誌の連載第3・4回では「ストルガツキイ」を使用し、1987年、『ソヴェート文学』に発表した「火星第二

の襲来 — 或る常識人の日記 —」では、「ストルガーツキイ」を使用している。本作が掲載された『ソヴェート文学』98号では、橋本が執筆した個所以外に「ストルガーツキイ」の表記が使用されていることから、訳者の意向と合わせて編集あるいは出版元の意向があることをうかがわせる。

瀬川が採用した「ストルガツキー」と彦坂が1968年に使用した「ストゥルガーツキイ」は、他4種類の基本となる「ストルガツキ」に、「ッ」または「ウ」が挿入されており、書誌情報を五十音順あるいはキーワード検索により見出すことを困難にしている。さらに、「ロボット大あばれ」は原作と題名が大きく異なっており、書籍を確認しなければ原作を判断することができない。このためトーキングヘッズ編集室が本作の存在を確認できず、「ストルガツキー兄弟邦訳解説総解説」に含まれなかった可能性があると考えられるのである。

6. 掲載分野の影響

4章に示したストルガツキー兄弟の作品集は、同人誌である『イスキューチェリ』に掲載および、本稿で今回報告するものを除き、トーキングヘッズ編集室が作成した「ストルガツキー兄弟邦訳作品総解説」に含まれている。ここでは、「六本のマッチ」の四回の出版、書籍未掲載の『S-Fマガジン』掲載作品や、SF愛好家が通常確認しない『ソヴェート文学』のようなロシア文学誌などを対象に精力的な調査がおこなわれた。この中で、大伴昌司編、『毎日新聞少女シリーズ 世界SF名作集 シニア版』と、瀬川昌男・花野原芳明、『三年生の学級⑧三年生のS・Fものがたり』がこのリストに含まれなかった理由として、前掲の著者名表記ゆれに加えて、掲載分野の影響があると考えられる。

この二冊はいずれも、児童向けとして出版されたシリーズの一部である。さらに訳者・編者は、袋一平・彦坂諦・深見弾・中沢敦夫らのよ

うなロシア語専門家でないことから、調査の際に見過ごされた可能性がある。また、インターネット上で検索可能なSF・ホラー・ミステリー翻訳作品リストとして、雨宮孝氏によるものがある。¹⁷⁾ このリスト上のストルガツキー兄弟の作品は、「ストルガツキー兄弟 邦訳作品総解説」よりも少なく、前掲の二冊の児童向けSFは掲載されていない。例としてイギリスのSF作家、John Wynhamの *The Day of the Triffids* (1951) を見ると、

『21世紀の文学 世界SF全集 19 ウィンダム トリフィドの日 地衣騒動』早川書房、1963

『トリフィド時代 食人植物の恐怖』創元推理文庫、東京創元社、1984

は掲載されているが、

『少年少女世界SF文学全集 19 怪奇トリフィドの侵略』あかね書房、1973

『SF恐怖シリーズ③植物人間 地球滅亡の日』秋田書店、1974

『世界文学全集 47 世界SF傑作選』学習研究社、1978

は掲載されていない。同氏によるドキュメント (Document) には、特に収録書籍の条件については記されていない。しかし、児童向け作品では、抄訳あるいは翻案となる場合があり、そうであるなら、原作を部分的にしか反映していないため、これを避けたことも考えられた。本件について雨宮氏に問い合わせたところ、未確認の作品や二次資料の作品は除外しており、この中に翻案ものや子供向けもあるとのこと。個人作成のリストのため、少しでも確度をあげておきたいという考え方で編集しているとの返信を得た。(2021年9月12日確認)

このように児童向けに翻訳された作品の中には、既存のリストに未掲載の作品が存在する可能性を留意すべきである。

7. おわりに

本稿では、トーキングヘッズ編集室が作成した「ストルガツキー兄弟 邦訳作品総解説」未掲載の作品として、『三年生の学級⑧三年生のS・Fものがたり』収録の「ロボット大あばれ」文・瀬川昌男 絵・花野原芳明を見出し、これがリストに載らなかった経緯について整理した結果、原作者のセカンドネームの邦訳表記にゆれがあったことや、掲載分類上児童文学として翻案された事実がその主たる原因であると論じた。

インターネットやデータベースでの検索の際、選択したキーワードの表記ゆれを考慮し、検索をおこなう必要があるが、その作家名がどんなカタカナ表記になっているかをすべて明らかにしないかぎり、リサーチ完了と言えない。完全なリスト作成のためには、思わぬカタカナ表記や掲載分野の影響で一大リストから漏れている作品を知る人からの積極的な情報発信が重要である。そうして人の手により検証、報告、入力されたデータは、今後コンピュータやAIのテクノロジーの活用も加わって効率よくまとめられてゆくはずであり、そのようにして我々は表記ゆれの問題からようやく自由になり、さらなる研究へ前進できるのである。

謝 辞

瀬川のロシア語翻訳に関して高橋良平氏にお問い合わせ頂いた本の雑誌編集部・松村眞喜子氏、群像社によるロシア人名に関してご連絡頂いた同社・島田進矢氏、インターネットに公開されているSF・ホラー・ミステリー翻訳作品リスト (ameqlist 翻訳作品集成) の編集方針に関してご教示頂いた雨宮孝氏に感謝致します。

参考文献

- 1) バージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』土屋政雄訳、光文社、2010。上記で述べた、二通り以上の表記方法がある作家名の一つの検索結果が別の表記の検索結果も含め

- て表示される機能,あるいは最も一般的な表記の検索結果へ自動で切り替わる機能は,たとえば,古書販売サイト Amazon で有効であり,2021年9月現在,「ヴァージニア ウルフ」と検索すれば「バージニア」表記のこの土屋訳が見つかる.ただし,土屋訳のページから作者「バージニア ウルフ」をクリックしても,ジャンプ先で「ヴァージニア ウルフ」表記の和書へ導かれることはない.
- 2) 土屋「訳者あとがき」,バージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』土屋政雄訳,光文社,p.374,2010.
 - 3) 前掲,p.376.
 - 4) 同じく Amazon では,2021年9月現在,「ドライサー」と検索すれば,上記した複数のファーストネーム表記の本が容易に見つかる.加えて,セカンドネーム「ドライザー」表記のものも検索結果から取りこぼしなく,たとえば,ドライザー『アメリカの悲劇』(上・下)大久保康雄訳(新潮社,1978)にもたどりつく.興味深いことに,大久保訳の表記「ドライザー」は,Amazonのウェブサイト上では「ドライサー」となっており,表記ゆれがサイト内で回避されている.
 - 5) ストルガツキー兄弟のロシア語表記と誕生・死亡年日は後述する.
 - 6) 1991年モスクワの Издательство Текст 社より,10冊の選集に2冊の補巻を加えた《Аркадий Стругацкий, Борис Стругацкий. Собрание сочинений》が出版されている.また,現在,ストルガツキー兄弟の書簡を含む全33巻の全集《Полное собрание сочинений》がサンクトペテルブルクの Машина времени 社より刊行されている.この全集の出版の経緯などは,服部玲「海外出版レポート◆ロシア ストルガツキー兄弟の『全集』のことなど」(出版ニュース,2482,pp.22-23,2018)が詳しい.
 - 7) ストルガツキー兄弟「びっこな運命」Khromaia sud'ba.《Volny gasiat veter》. Sovetskii pisatel', 1989. 解説: 中沢敦夫: 現代ロシア文学 Reference guid-on-line (<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/literature/strugatskii.html>) <2021年10月1日アクセス>.
 - 8) A & B・ストルガツキイ(深見弾訳)『世界終末十億年前—異常な状況で発見された手記』群像社,1989. 本書 pp. 214-217 に中・長編に限った邦訳を含む作品リストが掲載された.
 - 9) トーキングヘッズ編集室『ストルガツキー兄弟, トーキングヘッズ叢書第1巻』, トーキングヘッズ編集室, 1992. 本書に全作品とその邦訳を対象としたものが掲載されている. この全作品リストは <http://www.a-third.com/th/author/strlist.html> で公開されている<2021年10月1日アクセス>.
 - 10) トーキングヘッズ編集室, 前掲, pp.28-40.
 - 11) 大伴昌司「コムリン博士の六本のマッチ」ストルガツキー兄弟原作,『毎日新聞少年少女シリーズ 世界 SF 名作集 シニア版』, 毎日新聞社, p.103, 1964.
 - 12) 山主敏子「四つの S・F ものがたり」, 瀬川昌男『三年生の学級⑧三年生の S・F ものがたり』, 集英社, p.184, 1974.
 - 13) 瀬川昌男 書誌(未完). web本の雑誌, <http://www.webdoku.jp/shoten/special/2011segawa.html><2021年10月1日アクセス>. 署名のないこの書誌の作者を高橋良平と推定する理由は,web本の雑誌にて「本格宇宙小説作家第一号・瀬川昌男さんのこと」(http://www.webdoku.jp/shoten/special/2011/1101_144104.html)と題したコラムを寄せており,この下にこの書誌のリンクが張られているため.
 - 14) 前掲, p.185.
 - 15) 瀬川昌男の時空 猫と宇宙とファンタジー, <https://web.archive.org/web/20070831233835/http://segawa-m.kir.jp/index.html><2021年10月1日アクセス>. なお,本ウェブサイトには瀬川自身の発表リストが掲載されており,『三年生の学級⑧三年生の S・F ものがたり』はあるが,ストルガツキー兄弟について記述がない.
 - 16) 瀬川昌男:「作品と原作者について」, エム・イーラム作他『世界こども名作館 8 SF と未来篇 空飛ぶ円盤の三巨人』瀬川昌男訳, 潮出版社, p.189, 1974.
 - 17) 雨宮孝: ameqlist 翻訳作品集成 (Japanese Translation List) <https://ameqlist.com/index.html><2021年10月1日アクセス>

要 旨

本稿では、ロシア SF を代表するストルガツキー兄弟の邦訳リスト未掲載の作品として、瀬川昌男訳「ロボット大あばれ」を見出し、それが、翻訳による原作者名の表記ゆれによるバリエーションが多く、また一般の SF 作品リストの範疇にない児童文学のため、このリストに未掲載であると判断した。

キーワード: SF, 作家名, 児童文学, 表記ゆれ, ロシア